

3. 学校で発見した「わかる」「できる」を社会生活に活かす

(1) 「わかる」「できる」を活かした支援

高等部の生徒たちは、卒業すると皆社会へ巣立っていく。一般就労・福祉就労など進路は様々であるが、その行き先にかかわらず、自立への扉を開くのである。しかし、完全に自立した生活を営むことは難しく、多かれ少なかれ周囲のサポートを必要とする。

障害者を取り巻く人々が彼らをサポートする上で必要なことは多々あるが、とりわけ就労において重要となるのは、その人は一体どんなことができるのか、何が得意なのか、何が好きなのか、どういうことが向いているのか、どういう説明の仕方をすれば理解できるのか、などといったことであろう。これらの「情報」をいかにして見出し、活用できるかが、社会生活をサポートするうえで重要なものとなるのである。

この「情報」を得るために、サポートをする人は、自分の眼で本人や就労先の様子をつぶさに観察したり、家族やこれまでにかかわりをもった人など様子をよく知る人に話を聞いたりする必要があるわけだが、例えばある人をこれから新しくサポートしようとした時に、一から情報を集め直すのはかなりの時間と労力を必要とする。このサポート（支援）をする上でのポイントがわかりやすくまとめられていれば、社会生活へのよりスムーズな移行が期待できる。

養護学校では、少なくとも高等部の3年間、長い場合は小学部からの12年間の、蓄積された情報がある。どういうふうな提示の仕方をすれば「わかる」ようになったのかといった事例がたくさんある。その情報をわかりやすい形でまとめておくことは、卒業後の社会生活を支援する上で有益であると思われる。

(2) 就労支援において必要な情報～個別移行支援計画と具体的な支援のポイント

進路を選択・決定する上で、本人および保護者の希望や、在学中の進路学習の記録などをまとめておくことは、卒業後の社会生活支援に必要なことになると思われる。また、在学中に卒業後の社会生活を想定した支援の計画を練っておくことは、在学中の進路学習を設定する際の大きな手がかりともなる。これらをまとめたものが、個別移行支援計画である。

東京都知的障害養護学校就業促進協議会が、平成11・12年度に文部科学省から委嘱を受けて行った研究の中で策定された「個別移行支援計画」では、学校在学中に活用する計画表を個別移行支援計画（1）、卒業後に必要な支援や関係機関との連携を明らかにした表を個別移行支援計画（2）とし、次のような項目を記載している。

個別移行支援計画（1）：

- 校内における進路相談、関係機関との進路相談の記録
- 本人の希望、保護者の希望
- 一般就労に向けた、本人・保護者の希望をもとに考えられる支援計画長期・短期の支援内容と評価、具体的な課題、学校での学習場面
- 現場実習の様子
- 本人・保護者の評価、実習先の評価のまとめ
- 今後の方針

個別移行支援計画（２）：

- 本人のプロフィール
- 氏名、性別、生年月日、住所、出身校・担当者
- 将来の生活についての希望
- 必要と思われる支援内容
- 具体的支援
- 家庭生活、進路先の生活、余暇・地域生活、医療・健康、出身校の役割
- それぞれの担当者と支援内容

これらの項目の他に、実際支援にあたる人、特にこれまで障害者と接した経験がない、もしくは少ない人にとって、具体的にどうすればいいか、例えば何かを教えたいと思ったときにどういう教え方をすればいいのかといった具体例がとても役に立つということをよく耳にする。こういった実際の様子をまとめた、いわば「支援のポイント」といった情報を、個別移行支援計画と合わせて用意しておくことが、障害者の社会参加を促進する上で大きな役割を果たすと考えられる。

（３）「支援のポイント」をまとめるにあたって

当然のことながら、支援の仕方といったものは、一人一人違うものである。また具体例として挙げる事柄も、どのようなことが役に立つのかを考え、精選しておくことが必要である。そこで「支援のポイント」として必要になるような項目を考えてみた。

技術に関するデータ

何ができるのか、何ができないのかを明確にする。また、利き手はどちらかといったことも、できる仕事を判断する上で必要になる場合があると思われる。

興味・関心に関するデータ

こういう活動をしているときに、こんな反応があったので、その活動は好きであると思われる、という具体的な事例を元にした興味・関心の傾向も、仕事内容を考える上で有益なデータになると思われる。

「できる」「わかる」ようになった経緯

できるようになるためにはどのような手段・方法で習得していったかなどの具体例は、先にも述べたように、支援の仕方を考える上でとても参考になるため、書く内容は精選しつつも、ひとつのことをできるだけ詳細に記述するようにしておく必要があると考える。

「わかった」「わからない」場合の反応

説明や実演などで伝えていく中で、わかった時にはどのような反応を示すか、またわからない時にはどんな示し方をするのか。支援をする側としては、これを知ることによって必要に応じて教え方を変えていくことができると思われる。

本校では、これまで現場実習（産業現場等における実習）の際に、「現場実習生について」という様式を作り、性格や健康面、言語理解などの様子を記述する際に、いま述べたような具体例をあげるようにしてきたが、よりわかりやすい様式を検討し、「支援のポイ

ント」を作成していきたいと思う。

(4)「支援のポイント」の項目例

これまでのことから、先にあげた「個別移行支援計画」の中にはない項目を補うようなものとして「支援のポイント」の具体的な項目例を考えてみた。

以下に、記入例を交えながら、その項目をあげてみたいと思う。

①所属作業班

高等部3年間の所属作業班とそこでの仕事の内容を記述する。

例 第1学年 製菓班 クッキー作り

②身体面

利き手(右・左)、握力、視力、色覚、その他健康上の留意事項などを記述する。

例 ・てんかん発作があり、1日1回服薬中である

③技術面

できることやできないことを記述するとともに、特徴的なことがあれば付記する。

例 ・ハサミを使うことができる 本来左利きだが、ハサミを使う際は右手で使う
・体力的に不安があり、長時間の立ち仕事などは継続が難しい

④好きなこと・得意なこと

本人の意思表示が難しい場合には、周囲からみた様子で記述する。

例 ・作業学習でビーズアクセサリー作りを選んだ
当初は理由が不明だったが、修学旅行の際、土産物屋でキラキラ光るものに目がくぎづけになっていたことなどから、キラキラした物が好きでビーズの作業を選んだことがわかった

⑤理解の仕方

「できる」「わかる」ようになった経緯を記述する。

例 ・マット運動の技を覚える際、言葉や図での理解は不十分だが、実際に横でしてみせることで理解し、できるようになった
・百人一首で、歌を読んで覚えるのは難しかったが、紙に繰り返し書くことで覚えることができた

⑥理解した際の様子・理解できない場合の反応

理解した際、できない際にどのような様子なのかを記述する。

例 ・何をしていたかわからない場合に、ただ立ちつくすだけで、周囲にさぼっていると誤解を受けることがある
・言葉での指示で、わかった時はしっかり返事をしてから行動に移るが、わからない時は「○○○です」と言葉を濁すことがある

今後、このような項目を含めて、本校としての個別移行支援計画の様式を考え活用していきたいと考えている。

(島田 勝 浩)